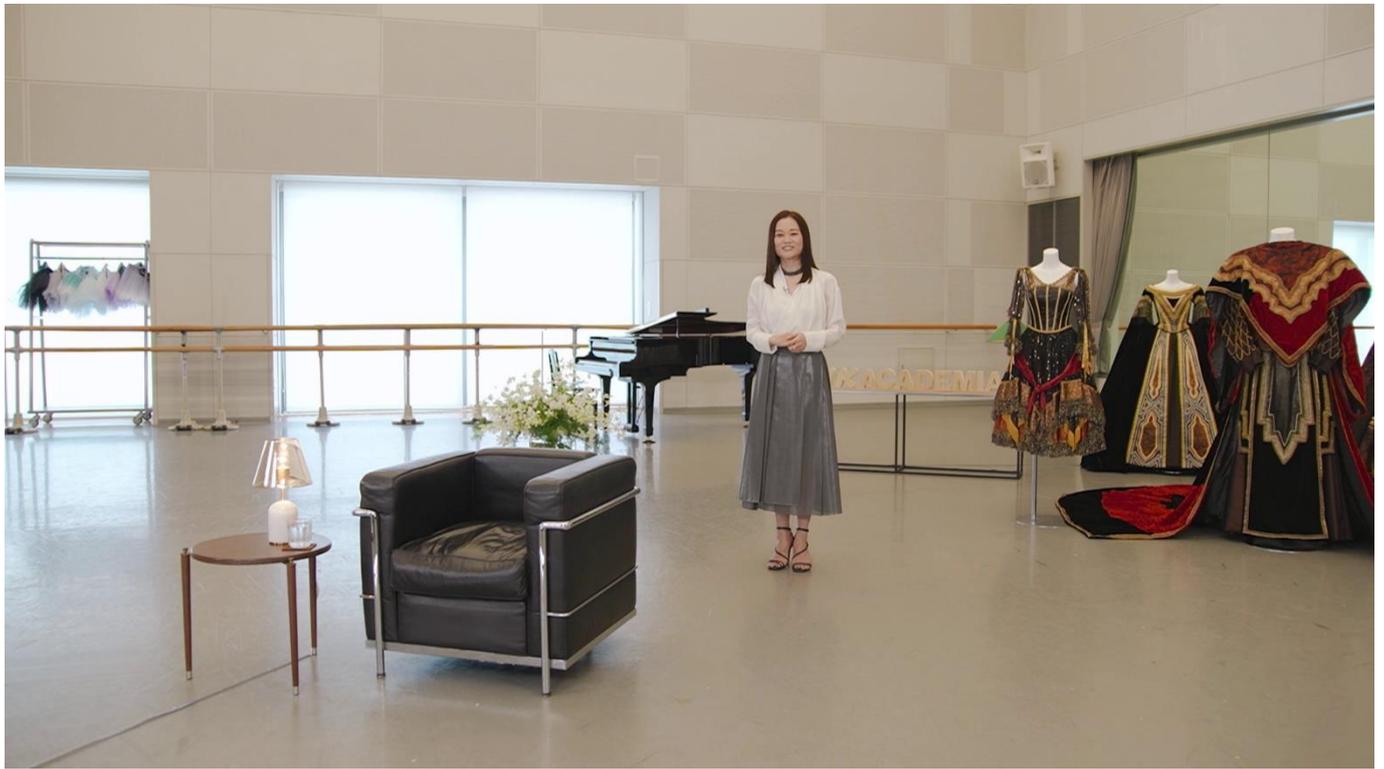


NHK アカデミア 第5回<芸術監督 吉田都>



こんにちは、芸術監督の吉田都です。今日はカメラの向こうの皆様と生でつながれていることを、とても楽しみにしておりました。初めてなので、いろいろ不手際があるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

ここは、新国立劇場の地下2階にあります「バレエリハーサル室」です。このスタジオの他にもう一つあるんですけども、ピアノがあって、バーがありますね。ここは、ダンサーがいちばん時間を過ごす場所です。毎日朝からお稽古をして、リハーサルをする場所です。天井もとても高いですよ。劇場と同じような空間を感じられるということと、リフトしたりしますので、高くなくてはならないんです。あとスタジオの大きさも、劇場の舞台の大きさと同じぐらいになっています。だから、ここに立たなくてはならないというときに、ちゃんとそこに行けるようにマークも付いています。横幅は、このスタジオの先に舞台の袖があるような感じですね。あと奥行きも、舞台の方がもう少し奥があるという感じです。



聞き手 生田聖子(15年にわたり吉田さん取材)「今日は、参加者の多くの皆さんが、バレエの経験者でいらっしゃるようなんですね。多かっただご質問が『バレエの演目について、都さんがどんなふう解釈をして、今まで踊られてきたのか』。そういったことを知りたいというお声がありまして、具体的に踊る上で大切にされてきたこととか、技術的なポイントとか、ぜひお話を伺えればと思います」

<「表現」と「技」へのこだわり>

※「ドン・キホーテ 第一幕」映像(開始点 04分 28秒)とあわせてご覧ください。

吉田さん「これは『ドン・キホーテ』ですね。セルバンテス原作で、150年以上前に作られた古い作品なんですけれども、スペインを舞台にした主役のキトリとバジルの恋物語で、コミカルな喜劇で最終的にはハッピーエンドなんです。けれどもお父さんに反対されたり、いろいろあって…」

生田「都さんが踊られているのが、キトリですね」

吉田さん「古典なんですけれども、スパニッシュスタイル、例えば三幕の最後にグラン・パド・ドゥがあって、32回転というかなりテクニカルなものが入っていて、ソロもジャンプが入っていますし、回転も入っていますし…キトリの明るさだったり、強さだったり、爆発する若さだったりというのを、エポールマンとか、腕の使い方だったりとか、目線とかで表現しているんです。ジャンプする前の5番(バレエの基本ポジションの一つ)に締めるとか、斜めの回転のところはエファッセで、やっぱり5番にきちんと締めるとか、そういうテクニカルなところもすごく気をつけなくてはならないんです。

村娘ですので、おとぎ話のお姫様とかを踊るよりは、普通の女性の表現ができるので踊りやすい作品ではありません。でも夢の場面とかは、やはりクラシカルなきちんとしたテクニックで魅せなくてはならない。そうい

う踊り分け・演じ分けみたいなものも、とても興味深いところです。バレエ作品で私がだいたいご味だと思えるのは、作品の全幕を通して、例えば『白鳥の湖』だったら白鳥と黒鳥の演じ分けとか、そういうところがとても楽しく、踊りがいがあると感じられるところですね」



吉田さん「こちらは有名なシェイクスピアの作品『ロメオとジュリエット』ですけれども、悲劇ですよ。最後に二人とも死んでしまうんですけれども、こちらはテクニックで魅せるというよりは、ジュリエットを、全幕を通して生き抜くみたいな、舞台上で、ジュリエットを演じるというよりも、本当に生きているような感覚が持てます。これはケネス・マクミラン(イギリスを代表する振付家)の作品なんですけれども、そこが私自身、とても苦労した部分でもあります。でもいちばん好きな作品で、ロイヤルバレエ団の引退公演にこの作品を選んだんですけれども、私にとっては本当に大切な大切な作品ですね」

生田「あのときも表現の部分に最後までご苦労されていたというか……」

吉田さん「そうです。すごく悩んでいたんですよ。『相手に委ねる』っていうんですかね、他のクラシックバレエというのは、自分の軸できちっと自分で踊るとというのが基本なんですけれども、ケネスの作品は、『委ねて』というのが多いんですよ。それがやはりなかなか難しかったです。私は、たくさんのロメオと踊らせていただいたんですけれども、振付は一緒でも皆さんそれぞれ違うので、彼がどういうふうに演じるかによって、私のジュリエットも変わるんですよ。パートナーが変わることによる楽しみもありましたね」

「ロメオとジュリエット」

NHKACADEMIA



吉田さん「バレエ学校の生徒さんたちがバレエコンクールに参加したりして、作品に取り組んだり、技術を磨いたりというのはとてもいいことだと思うんですけども、バレエの全幕ものを踊って、その中で自分も成長していくということの楽しさを知ってしまうと、私も学生の頃、コンクールに出ていましたけれども、あのときに踊っていたバレエというのは、まだ入り口にも立っていなかった気がします。想像力をたくましくして、自分で自分がないものも出していかなくてはならないんですけども、本人の感じ方だったり、人生観だったりというのは、やはり全部出てしまいますから。

若いときって、自分の若さのことは分からないですからね。それをすごく感じるんです。その若さを失ってみて初めて、『若いってこういうことなんだ』ということで、より表現しやすくなりましたね。若いときはパワーもあって、踊るということはアスリート並みの体力も必要なんですけれども、私の中では、そういう元気が少なくなってきた頃から、何となく落ち着いて踊れる、演じることを少し楽しめるようになってきました。舞台でお客様と、その時間と空間を共有することをより楽しめたのは、私のキャリアのあとの方でした」



吉田さん「クラシックバレエの魅力と言ったら、本当に話が長くなってしまいうんですけれども、ずっと私は踊り手として、長く舞台に立ってきたので、踊るだご味というのをずっと感じてきていたんです。でも、今こうして芸術監督として反対側から見ると、ますますバレエが好きになっているんですよ。総合芸術としてのすばらしさを、より実感しているんです。ダンサーたちは舞台に向けて、毎日毎日ここでリハーサルをして…それが本番の日に、生のオーケストラだったり、プロのクリエイティブスタッフであったり、最終的にはお客様もなんですけれども、エネルギーがぱっと合わさったときの感動というのは、その劇場の中にいないと感じられないものなので貴重に思います。芸術監督の仕事もハードなんですけれども、やはりバレエとダンサーたちに力をもらっています」



kanon さん(滋賀)「都さんのキラキラした目が大好きです。表現する上で、いちばん大切にしていることは何ですか」

吉田さん「自分の気持ちの中では役柄の気持ちになっているつもりでも、お客様に魅せなくてはいけないというところに、私はいちばん苦労したので、表現するときというのは、やはり表情とボディーランゲージと、間(ま)、そういうことをすごく気をつけていましたね。目線も大切ですし、ちょっとした顔の角度でも何を表現したいかというのが変わりますので、いろいろなことで表現できると思います」

SHIZUKA さん(兵庫)「私はふだん表現力を身につけるために、バレエ団の公演を鑑賞したり、バレエ演目の背景を理解したり、自分の意見をはっきり言えるように努力しているんですが、バレエ以外で表現力を身につける方法があれば教えていただきたいです」

吉田さん「きっとバレエだと海外に出たりということも多いと思うので、英語だったり、フランス語だったり、言葉を学ぶということは、その国の文化を学ぶということにもなるので、それはすごく演じる上で、あとマイムとかするときにとっても役に立つので、もしできるのであれば勉強していったらいいと思います。日本人は、フランス的な演技とかジェスチャーというのが、なかなか難しいんですよ。だから私がダンサーたちに提案したのは、例えばフランスの映画を観ること。フランスの人たちが、日常どうやって話して、どういう食べ方をして、何を食べているのかということを観察することなんです。私もイギリスに行ったときは、みんなのことをジーンと見ながら人間観察して、驚いたときはどういうふうな体の動きになるのかとか、悲しいときはどうなのかとか、そういうのを見られるとすごく参考になるんですよ。向こうの人って表現が激しいので、私が実際にまねをしたらちょっとそれは違うかなと思ったり、私がやって自然になるのはどういう形なのかとか考えたり、そういうことも多分参考になると思います。だから、外国映画とかフランス映画をよく観てもらえたらいいかもしれませんね」

桜子さん(東京)「私はバレエを始めて9年目になるのですが、成長期に入って身長が急激に伸びて、体のバラ

ンスが大きく変わってきました。都さんが踊るときに気をつけていたこととか、体のメンテナンス方法で気をつけていたことなどのアドバイスをいただけたらうれしいです」

吉田さん「今、おいくつでしたっけ？」

桜子さん「13歳です」

吉田さん「本当にね、ちょっと身長が伸びただけでもバランスが変わってしまうから…でも今はとても大切な時期で、まだ体がしっかり出来上がっていないときなんです。体が落ち着くまでちょっと時間がかかったりするんで、それまではそんなに焦らない。それよりも、体の中の例えば骨を強くすることが、まずは大切なので、そんなに心配しなくていいと思うんです。でも踊っていて、『あれ。なんでこれができないんだろう』となってしまうかもしれない。そこは、『できていたのに、どうして?』っていうふうに考えない方がいいです。今はしっかり食べて、ちゃんと動くことも大切ということですね。でも、けがにつながっていったりするときは、その原因を探って、どういう体の使い方をしたらいいのかというのを考えてやっていったらいいと思いますよ」

<世界的ダンサーへの道 「自分が嫌い」を乗り越えて>



吉田さん「幼稚園の頃にバレエに出会ったんですけれども、そのときから『これがやりたい』という気持ちは変わらず、ずっときています。バレエの全てに魅せられてしまったというか」

生田「いちばんどんなことを覚えていますか」

吉田さん「やはりスタジオのことを覚えていますね。木の床で、バーがあって、鏡があってということに、本当に『ワァ』ってどきどきした記憶があります。

幼少期は、かなり厳しいお稽古でした。小学校高学年から中学生ぐらいがいちばん長時間のお稽古で、先生もとても厳しくて怖い先生だったんですけども、そこでみっちり基礎を学ばせていただいた。私自身、教える立場になって、教えるということがどれだけエネルギーがいるかというのを考えたら、先生が何時間もつきあってくださったというのも本当にありがたいと思います。とにかく繰り返し繰り返しですね。同じことの繰り返しで、それを体に入れ込むという作業をずっとしていました」

生田「でもよく嫌にならなかったですね。そんな子どもの頃に」

吉田さん「そうですね。今はもっと効率よくできると思うんですけども、頑張れば頑張るほど、上手になるのではないかというのが私の中にあっただけで、やはりあそこでたたき込まれたことというのは、本当に体が覚えていますし、あの苦しいときを通り過ぎてきたから、何かあったときに『あれが耐えられたんだから、こんなの何でもない』って思えた。それはあとあと助かったというか、そこがよりどころになったというのがありました」

生田「けがのときも、腹筋しながら見学していらしたとうかがったことがあるんですけども」

吉田さん「翌日も話せないぐらい、おなかが痛いぐらいにね。でも、それも毎日やっていると、どんどん強くなるみたいな。確かにやっていましたね…でも、つらいから、けがを早く治そうと思いましたよ」

生田「めきめき腕を上げられて、17歳のときに、ローザンヌ国際バレエコンクールに挑戦されましたね」

吉田さん「17歳だったんですよ。でも17歳より全然幼かった。見た目もそうですし、頭の中も本当に子どもでしたね。だから今の17歳とは、比べられない」



生田「他の人と比べても幼いと、ご自身が思っている 17 歳で、世界に、ロイヤルバレエ学校に行くことになるわけですがけれど、大きな決断でしたね」

吉田さん「大きな決断ではあったんですけども、自分の中では、ロイヤルバレエ学校に行けるなんていうことは夢のようなことでしたし、1 年頑張ればというところで行ったので、あまり大きな決断という感じはなかったですね。ただただうれしくて、楽しみで、ぱっと行ってしまった感じでした」

生田「実際に行ってみて、いかがでしたか」

吉田さん「『うわっ…なんかすごいところに来ちゃったかな』みたいな…。やはり英語も分からなかったし、何が起きているかわけが分からなくて、最初は、私は 1 年目なので 1 年生のクラスに参加していたんですけど、『違う違う、卒業クラスに入りなさい』ということで、翌日からそちらに行ったんです。その卒業クラスは、みんなホワイトロッジ(プロのバレエダンサーを目指す 11 歳から 16 歳の生徒が学ぶ全寮制の寄宿学校)というロイヤルバレエのジュニアスクールの出身で、まわりはイギリス人だけで、ぽつんと私ひとりでした。

舞台上に立つときは、衣装をつけてお化粧して照明が当たって華やかになったりするんですけど、みんなレオタードでも、ふだんからキラキラ感があるんですよ。それこそ漫画の世界から出てきたような容姿で。その中にポンと私が入ったときに、もう鏡を見るのもつらくて…かなりそういう意味ではつらかったですね。でも、ロイヤルバレエ団の公演に出させていただいたりして、結構忙しくはあったんですよ。だからそういう意味で気が紛れていたという部分もあるんですけど、やはり現実に直面すると、もうズーンという感じでした。

イギリスに渡ってすごく感じたのが、『努力してもどうにもならないこともあるんだな』という現実を突きつけられたことでしたね。『頑張ればどうにかなる』というのでずっときていましたけれども、それではちょっ

と届かないところだになってというのは感じました」

生田「容姿というと、生まれ持ったものですものね」

吉田さん「そうなんです。変えようがない。だから、鏡で見えないところに、バーをとったりして…」



生田「『自分の見た目が嫌い』というのは、どういうふう乗り越えてこられたんですか」

吉田さん「考えてみると、いまだに乗り越えられていないんですよ。やっぱりちょっと自分を見るのが嫌ですし、自分の踊りを見るのも嫌です。ただやっぱり踊ることが好きで、あのオペラハウスで踊る、あの舞台に立つという、あんなにすてきな場所はないですからね。だから、そこに立つためには、『何でも、どんなことがあっても』という気持ちでいました。変えられないところを悩むことに時間とエネルギーを使うよりも、どうしていったらいいんだとか、私は何がみんなと違うのかとか、やるべきことに集中した方がいいなというふうにはなっていましたね。

手足の長いダンサーたちは、本当に舞台映えするんですよね。その人たちと同じような印象を与えられるようにするにはどうしたらいいかとなると、それは体の使い方もそうですけれども、ちょっとした間の取り方で、例えば、すぐキュッって終わるのだと小さくなってしまわないので、終わったあとにふっと少し伸ばすと広がりがあるように見えるとか…。私はジャンプとか回転とか、鍛えられた部分があって得意だったので、そこでみんなよりも遠くまで飛んで、ジャンプで魅せるとか。自分にできるところで、魅せるようにしました」



吉田さん「つい最近ゲストで、スティーブン・マクレイさんが、ロイヤルからいらしていたんですけども、彼はオーストラリア人で、彼もイギリスという外国に行って…という話を聞くと、あれだけ優秀な方で、こちらから見たら何の問題もなくずっときているのかと思ったら、やっぱり似たような経験をしていて。あと、ダーシー・バツセルさん(イギリス出身のバレエ・ダンサー)も、私から見たら、『あんなに美しい脚』と思うんですけど、本人によると、ローザンヌに出演するときには『脚があまりにも汚いから、チュチュは着させてもらえなかった』って言うんですよ。トップスターできれいな脚をしているのに、そういうことを言われて、長い衣装で脚を出させてもらえなかったと。それぞれ本当に外から見ていると分からないことが、いろいろあります」



吉田さん「やはりロイヤル・バレエ団は全然違いましたね。あの感じというのは実際に中に入って、一緒にみんなと仕事をしてみないと分からないと思うんですけども、まずオペラハウスのエネルギーがすごいんですよ。しっかりと自分の足で立っていないと吹き飛ばされてしまうような感じでした。それこそオペラの方でも、当時、例えばパヴァロッティとかドミンゴ、カレーラス、ああいう方たちが舞台上に立っているような時代で、私の同僚にシルヴィ・ギエム、ダーシー・バッセル、ヴィヴィアナ・デュランテというバレリーナたちがワサワサいて、しかもロイヤル・バレエ団というのは、世界中からそのときに活躍されているトップダンサーが、いつもゲストでいらしているような状態だったので、とても刺激的な場所ではありました。離れたら余計、『よくあそこでやっていたな』とつくづく思いますけれども、やはりオペラハウスでロイヤルバレエ団のプリンシパルとして舞台上に立っているということは、本当に特別なことだったんですよ。あそこで主役を踊れるという夢のようなことが起きている日々だったので、それはやっぱり頑張りますよね。何でもやろうと思うぐらい」



吉田さん「プリンシパルという場所も、私がいるからそこに上がれない人もたくさんいるわけですよ。この役を踊りたいという人がどれだけいるか、そういう人たちの我慢の上にはないですけども…それを考えると、やはりそれだけのものを見せないとという気持ちで、必死でした」

<5 3歳まで踊り続けられた理由>



生田「バレエダンサーを長く続けてこられた理由は？」

吉田さん「バレリーナは、30代40代ってすごく良くなっていくところなんですよね。身体的にはつらくなっていくんですけども、いちばん充実しているというか、自分の人生経験とかいろんなことがピタッと合ってきて、より納得のいく表現ができるようになっていくんです。子どもの頃からやっている朝お稽古をして、リハーサルをしてという生活が当たり前になっていたんで、そこから離れるという勇気も持てなかった。とにかく踊ること、舞台上に立つことが好きでしたし、だからできるだけ続けたいという気持ちで踊っていました。

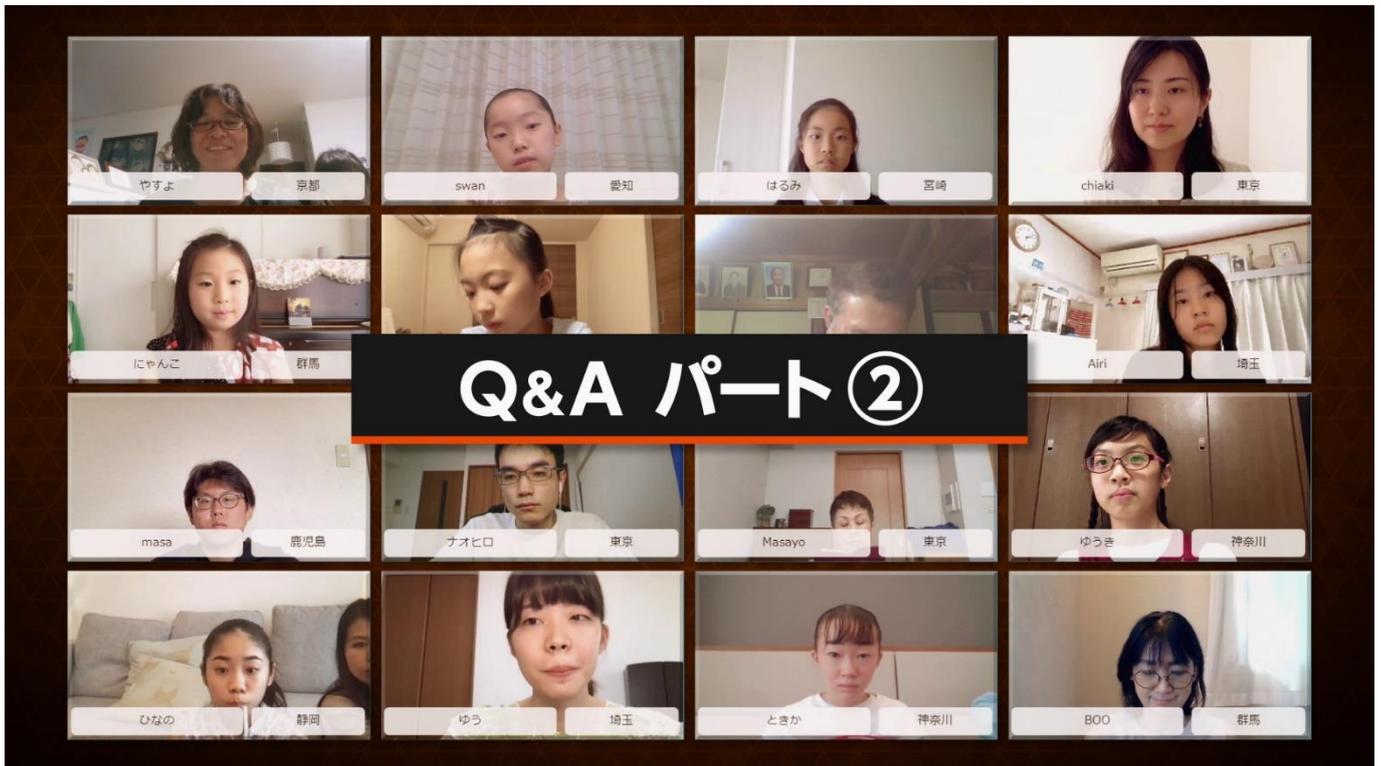
でも、自分の中では迷っている部分もあって、やっぱり思うように体も動かなくなってくると、それこそ自分が嫌になりますし…ただやはり、その年代でしか出せないものというのもあるんですよね。そこがアスリートと芸術、同じ体を動かすにしても違うところなんだと思うんです。お客様がそこを喜んでくださる部分もあったりするので『もう少し頑張りたい。もう少し頑張りたい』という感じで、長くなってしまったんです。

でも、だんだん自分の理想とは離れていくわけですよね。自分の理想とする踊り方というのと。ただ、少し自分の踊りを認められるようになっていったんですよね。若いときの方が自分の踊りが嫌いで、徐々に今の方が少しは良くなってきているかなと」

生田「毎回『これで良かった』って、おっしゃらないですよね」

吉田さん「満足した舞台はないですからね。必ず舞台のあとは反省ですね。ひとり反省会じゃないですけども、全部その日の舞台を振り返って、次はどうしたらいいのかなというのを考えていました。今、踊らなくな

ってみて、初めて気づくこともあります。朝起きたときに、痛みなく起きられる…毎日、全身打撲みたいな痛みで起きていたわけです。毎日、限界にプッシュプッシュした生活だったので、だから今は本当にそういう意味では快適です」



ゆうさん(埼玉)「先日、『ラストダンス』を拝見させていただいたのですが、イレクさんに『ミラー・ウォーカーズ』を踊るのが厳しいと正直に打ち明けていらっしゃったシーンが印象的でした。私は自分自身の問題に直接向き合うことが怖くて、いつも空回りのポジティブというか、どうにかなるでしょうと無責任に問題から目を背けてしまうことが多くて、それが悩みです。都さんの逃げない姿勢はどのようにして身についたのかを教えてくださいたいです」

吉田さん「『ま、いいか』というのも、とても大切ですけどね。全てに向き合ってしまうのも、ちょっと厳しいときもあるので。ただ、イギリスで自分の意見をはっきり言う人たちばかりの中でずっと過ごしてきたので、私は言うことが苦手で、自分の中で我慢してしまったりするんですけども、やはり自分の気持ちを正直に話すというのも、大切ではないかなと思っています」

のどかさん(神奈川)「今、中学3年生で受験の年で、バレエも好きなんですけど、受験をもっと頑張りたいという気持ちがあります。高校生になってからもう1回バレエを頑張ってみようというのは、バレリーナとか、そういう道に進む上で、大丈夫なのかなと思っています…」

吉田さん「不安になるかもしれないけれども、ちょっと離れるぐらいだったら、けがとかで離れたりしても、ちゃんと戻ってこられるので大丈夫…だって偉いね、勉強好きなのね(笑)。受験に集中してからというのでも全然間に合うと思いますよ。体を戻せるかというのは、まだ若いし大丈夫です。ちょっと苦労するかもしれないけれども、それを覚悟でやるのであれば全然大丈夫です」

やすよさん(京都)「子どもの頃からずっとバレエをやっていたんですけど、背骨のことで手術とかもあって、

バレエは続けられなくなってしまったんですけども、都さんがずっと憧れでした。踊りもすごい品があるし、でもそれには毎日努力をされていて、高校生のときに親元も離れて、海外で東洋人が頑張ってやっていくという中で、理不尽なことだったりとか、つらくて落ち込んだりとか、自分はこうしたいのにうまくできないとか、そういう思いがすごいあったと思うんですけども、そういうときにどうやって自分を鼓舞して、トップで頑張ってくることができたのか、お伺いしたくて」

吉田さん「当時は、若さがあったからできたのかもしれないですけども、そこに飛び込んでしまって。例えば今だったら、人種差別とかすごく言われている中、当時はそんなに言われていなかったんです。イギリスですすね、私は外国人で女性でとなると、それはもういろいろありましたけれども、私の中では『それはそういうもの。みんな違う』ということで、自分を納得させていた部分があります。少なくとも劇場の中では、プリンシパルとしてリスペクトしていただいて、あまり外国人だということを感じないような、バレエに集中できる環境というのが整えられていたというのが大きかったと思うんです。

あとすごく感じたのが、ずっと私ひとりで闘う気持ちでいたところ、大きなけがをしたときがあったんですけども、そのときに、どれだけの人に支えられて今までやってきたのかというのを振り返ることができたんですよね。そこからはそれまで以上に感謝の気持ちを持って、あの場所にいられたことを本当にありがたく思う気持ちが強くなりました。そういう方に気持ちを切り替えるって言うんですかね、理不尽なことがあったとしても、こんな私がこの舞台に立てているんだからというふうに気持ちを持っていったということも多かったかもしれないです。

私が長く踊れたのは、皆さんのおかげだなというのもすごく思っています。最後、日本に戻ってきてからというのは、舞台でお客様のエネルギーをお借りして踊っていた感じなんですよ。だから、そのお客様たちがいなかったら、とてもとても続けられなかったと思いますね」

<芸術監督として伝えたい“表現の神髄”>



吉田さん「皆さん、芸術監督はスタジオの中で教えているというイメージがあるみたいなんですけれども、実際の仕事はもっと多岐にわたります。もちろん、バレエ団の方向性を決める、作品選びであったりとか、総合プロデューサー的な役割があったりするんですけれども、それに加えて、監督だったらしなくてもいいことを、今いちばん大切だと思って私がしているのが、『ダンサーたちを取り巻く環境の改善に努める』ということなんです。普通だったら、例えばロイヤルバレエ団のディレクターとかはそういうことはしなくていいんですけどね。アーティスティックディレクターなので。私が日本に戻ってきていちばん感じたことが、日本のダンサーたちの社会的地位があまりにも低すぎるということで、がく然としたんです。せめてここ新国立劇場からだけでも、もう少し環境を良くしていきたいと今頑張っています。

いちばん大きいところは、ちゃんとお給料が払われたり、保障があったり、年金があったりというのが、ロイヤルバレエ団の普通のことなので、時間はかかるとは思いますがけれども、目指していきたいというのはあります。あとは医療スタッフの充実。けがと隣り合わせでみんな毎日過ごしているんですよね。このスタジオで、みんないつも本当に限界に挑戦しているわけですよ。だからどうしてもいろんなことが起こるんですけれども、そういうときのサポート体制も充実させたいというのもあります」

生田「そういった待遇面での改善に加えて、ダンサーたちに指導という意味でいうと、監督として何に特に力を入れていらっしゃるのでしょうか」

吉田さん「私の中で力を入れたいのは『表現』の部分ですね。日本人はどうしても、スキンシップが苦手なんです。だからちょっとしたことで、それが出てしまうんですよね。そうするととても日本人っぽくなってしまいます。フランスの作品だったら、もう少しフランス的な空気を醸し出してほしいというところで、踊りだけではなくて、ちょっとしたしぐさや、いろんなところでそういうのが出てしまうので、それはちょっと細かく見えています。挨拶のキスとかも、やっぱり日本人は慣れていないじゃないですか。ハグとかも、向こうだ

ったらギュってするのも全然平気なのに、日本だとちょっと遠慮がちに隙間が空いているようなハグをするので…『恋人同士だったらもっとギュっとハグして』とかっていうので、全然変わってくるんですよ」



生田「表現という意味では、都さんが監督になられてから衣装もとても大切にされてきたというふうに聞いているんですけども、今回、特別に衣装をご用意いただいたということで、どういうものか教えていただけますか」

吉田さん「今シーズン初めに新しく作った、ピーター・ライト演出振付の『白鳥の湖』の衣裳の一部なんですけれども、向こうでデザインされたものをそのままのデザインで、日本で作りしました。もう何十年も前の作品なんですけれども、私が入団したときに、初めて踊った作品でもあるんです。今回、新国立劇場のために同じデザインで新しく作りしました。

前列の左から、第三幕のナポリ。その右が、護衛の衣装。そして、いちばん右が主人公のオデットですね。後列右が王妃の衣装。その左にあるのが、王妃のお付きの侍女のドレスです」(上写真)

生田「それぞれゴージャスですね」



吉田さん「ナポリの衣装を見ていただきたいなと思ったんですけども、すごく速い動きをする衣装なんです。いろいろな色とか生地が重なりあって、こういう感じに仕上がっているんですね。この衣装も、私、若いときに着たりしていたんですけども、昔よりもずいぶん軽く作ってくださったんです。踊るときは、より軽い方が踊りやすいということもあるので、それはいいかなと思っています」



吉田さん「こちらが護衛ですね。ただ立っているだけの護衛でも、こんなに凝っているんです。そしてこのマ

ントですね、実際向こうで作られているマントが本当に重いんですよ。動けないくらい重いというので、軽く作ってくださったんです。歩き方って本当に難しく、バレエ団のダンサーたちはバレエ用の歩き方に慣れているので、普通に力強く歩くというのがなかなか難しかったですよ。ところが、この衣装を着た途端に、すごい力強く…というのも、そうしないと歩けないくらいの重さがあるからなんです。全ての衣装においてそういう感じなので、それがやっぱり舞台全体の雰囲気に出るんですよね」



吉田さん「私はすごく侍女の衣装が好きなんです。王妃のお付きなので、王妃の両側にいる侍女なんですけれども、あの衣装も本当に重いんです。今回はこの衣装をみんなに着てもらえて良かったなというのをすごく感じてまして、どれだけ衣装が大切かということを思います。

日本に戻ってきてすごく感じるのが、いろんなものをすごく軽く動きやすく作ってくださったりするんですよ。小道具とかにしても。でもやっぱり軽いものを重そうに持つというよりは、実際に重いものをぐっと持つ方が、雰囲気が出るんです。例えば剣で戦う場面でも、あまりにも軽いものだと、重さとか力強さとか戦っている感じが出ないんですね。今回は違いますけれども、イギリスでは、マントの裏の生地がすごく凝って、本物の毛皮を使っているときも昔はあったりとか、やっぱりそれなりの動きだったり雰囲気だったりというのが出るんですよね。そこまでこだわるんだというのを、私はイギリスで学びました」



一度の失敗であきらめないで
チャレンジし続けてほしい

吉田さん「私が芸術監督になって、とても感じていることなんですけれども、毎年バレエ団でもオーディションをするんですけれども、私がロイヤルバレエ学校に留学していたときも、みんないろいろなところにオーディションに行って、とても落ち込んで帰ってきたという姿を見ていました。そのバレエ団のカラーに合わない場合は、優秀なダンサーでも落ちるときもあるわけですよ。だからそのオーディションに受からなかったとしても、この世の終わりでもないですし、ただ単にそのバレエ団のカラーに合わなかったというときもあるんですよ。だから『一回チャレンジしてダメだとしても、諦めずに続けてほしい』ということ、とても強く思います。それはバレエのチャレンジだけではなくて、多分一般の方でもそういうところがあるのではないかなと思うんですけれども、何回か失敗したからといって、諦めてほしくないですよ。私の場合も、続けてきたからこそ見えてきた世界というがあるので、『やりたいことがあったら、チャレンジしてほしい』というのがあります」



ゆうきさん(神奈川)「バレエを続けるために、日本の食べ物でこれだけは食べたいみたいな、外国に行っていて、大好きな食べ物はありますか」

吉田さん「イギリスに渡った当時、和食を向こうで食べられなかったもので、和食は恋しくなったかしら。ご飯とおみそ汁の食事は恋しかったかもしれないですね。でも私は、おすしとかは食べなかったんですよ。だからそういう意味では苦労はなかったかなと思うんです。向こうで長いツアーに行って戻ってくると、イギリス人がやっぱり自分たちの食べ物が恋しくなって、『ローストディナーを作ったから食べに来る?』って言われるんだけど、『私はご飯とおみそ汁が食べたいからいい』みたいな…やっぱり和食は恋しくなっていたかな」

MIYAMOTO さん(神奈川)「私は将来、日本のバレエ団に入りたいと思っているんですけども、今、毎日レッスンを受けていて、都さんが言っていた『正しくレッスンを受ける』ということがあると思うんですけど、体の中心のコアを鍛えるというのを、ふだんのレッスンで正しくレッスンするためには、どういうことに気をつけたらいいのかなと思って」

吉田さん「いろいろやり方はあると思うんですけども、皆さん、それぞれ骨格が違うじゃないですか。だから私が良かったということをお勧めしても、もしかしたら合わないかもしれないと思うので、やはり自分自身でどこが弱いんだろうとか、毎日お稽古に向き合うときに、ただやるのではなくて自分の体に向き合って、自分の体を理解してという作業が必要になってくるのではないかなと思いますね」

MIYAMOTO さん「どういうところが悪いかというのを見つけ出すために、していることってありますか」

吉田さん「自分で踊っていて、感じないですか。ここがちょっと足りないかなとか。これがもっとできたらいいかなとか。自分のステップの中でも苦手な部分があったら、なんでそこが苦手なんだろう、何が足りないんだろう、何ができていないんだろう、どこを使っていないんだろうというのを考えていったら、きっと答えが出てくるんじゃないかなと思うんです。

ただお稽古していると、もったいない。やっぱりちゃんと考えて、自分には何が必要なのかというのを、お稽古でそれを強化していくこともできるし、それを知るのもお稽古の中でだと思っただけです。だからそこはすごく自分に集中して、お稽古は本当に忙しいですよ、頭を使っていろんなところを考えながらやらないといけないので。でもお稽古で見つけられるし、答えも出てくるんじゃないかなとは思っています。頑張ってみてください」

masa さん(鹿児島)「長らくバレエの第一線で活躍されていて、とても素晴らしいなと思ったんですが、自分自身、大学生をしているんですけど、この先の進路とかを考えたときに、『好き』ということだけではなかなか続かないのかなと思ったりすることも多々あるんですね。都さんが、今まで第一線で長らく活躍していく中で、思ったことや、考えていらっしやったことをお聞かせいただけたらうれしいなと思います」

吉田さん「マサさんは、今、将来やりたいと思っていることとか、好きなことというのはあるんですか」

masa さん「大学で理系の学部で研究をしていて、この研究という道が続けていきたいというふうに考えてはいるんですけど、いろいろなことを考えたときに、やっぱり研究はなかなかお金がもうからないという話を聞いたりする中で、続けていきたいという好きという気持ちと、現実的な生活をしていくということを考えたときに、なかなか両立って難しいなと思うんです。都さんは、どのように考えてこられたのかなと思ひまして」

吉田さん「もしちゃんと将来の自分の人生設計ができていたら、私は多分バレエを職業に選んでいないんですよ。だって、特に日本は、バレエで生きていけないんですよ。だけれども、私はこのバレエに出会ってしまって…そういうことって頭になかったんですよ。ちょっとそこが足りないところだったと思うんですけど、だからこそバレエに向かっていたと思うんです。例えばロイヤルバレエ団で踊りたいとか、プリンシパルになりたいとか、そういうものもなく、ただ『踊りたい一心』でした。

バレエダンサーとして踊っている間も、そんなに長く続けられる職業ではないので、次のことを考えたりする方もいると思うんですけども、やっぱり『今日』なんです。『今日の自分』。今を生きているという感じできているので、その積み重ねが最終的にイギリスでのお仕事につながった。

私の経験からしか話せないですけども、マサさんがやりたいことを一生懸命続けていると、次の道筋というのが見えてくる気がするんですね。それがもしかしたら自分が思っていたところとは違うところかもしれないですけども、やっぱり自分のやりたいことを本気になってやるというのは、とても大切なことだなというのは思いますよ。

自分がいちばん必死になっていたときって、何かが変わったりとか、誰かが手を差し伸べてくれたりとか、何か起こるんですよ。だけれども迷いがあるようなときは、何も起こらない。だから、もしそういうふうに自分の気持ちでやりたいと思うのであれば、それに近づく何かを一生懸命やってほしいかなと思いますね」

masa さん「はい。ありがとうございます」

吉田さん「頑張ってください。ありがとうございました」

